

# スポーツボランティアに対する認識と参加意欲の関係について

— Jリーグと地域スポーツクラブボランティア参加者を対象にして —

Willingness to participate and recognition on sports volunteering: Focusing on the J-League and community sports club volunteer activities

体育学部体育学科

常浦 光希

TSUNEURA, Kouki

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

**要旨：**スポーツボランティア活動体験者を対象とし、スポーツボランティアに対するイメージと参加意欲の関係について明らかにすることを目的とした。

- (1) スポーツボランティアに対するイメージから「ポジティブな活動」因子と参加意欲の関係性がみられた
- (2) 日常生活規模のスポーツボランティアへの参加意欲には「スポーツ技能の活用」との関係性がみられた

これらの結果から、スポーツボランティア活動への参加意欲には、自身のもつスポーツ経験や技術、知識が活かされることがポジティブに働く可能性が示唆された。参加意欲に影響を及ぼす諸要因についてさらに詳細な調査が求められる。

**キーワード：**スポーツボランティア, 大学生, 参加意欲, 地域スポーツクラブ

## I. はじめに

我が国におけるスポーツ活動におけるボランティアは日常生活規模の活動から国際・全国大会規模のスポーツイベントまで、その存在なしに活動の維持は不可能になってきた(山口, 2007)。運動・スポーツ活動は「する」や「みる」だけでなく、「支える」といったスポーツボランティアの存在が重要視されている(文科省, 2010)。「スポーツボランティア」の実施率は、これまでの時系列変化をみても1割程度である(笹川スポーツ財団, 2016)。さらに、スポーツボランティア活動において、高齢化や担い手が不足しており、活動内容に関する情報が少ない等の課題が挙げられている(日本スポーツボランティアネットワーク, 2015)。新たなスポーツボランティア実施者を養成していくことがスポーツ活動の普及に求められる課題である。

これまでスポーツボランティアに関する研究は、イベントボランティアに参加を対象に参加者情報や動機といった活動意欲の要因分析に関する研究(長ヶ原は

か, 1991)や活動状況や活動意識といった実施者の満足感, 継続意志が明らかにされてきている(松尾, 1998)。これまでイベントボランティアに焦点が当たった研究が多く行われており、日常において定期的に活動するクラブや団体のボランティアを対象としたものは多くない現状である。スポーツボランティアに関する研究課題は、その行動原理の解明にある。それは、ボランティア人員を如何に確保するかという共通認識があるためである。スポーツボランティアを募集する際に参加動機, ニーズ, 条件といった活動に関する諸要因を把握・分析することは重要なことである。こうした人材育成を踏まえ、スポーツ基本計画(スポーツ庁, 2017)では、「指導者やボランティアの育成, アスリートのキャリア形成支援など, 大学は質の高いスポーツ人材の育成に重要な役割を担っている」と表記されている。スポーツボランティアにおいて、大学を重要な経営資源として捉えており、今後も大学生のスポーツボランティア活動を対象とした研究は必要であろう。特に体育系大学生が在籍する大学がスポーツボランティア育成に関わる可能性が高いことが予測され

る。スポーツボランティア活動に参加する学生の参加動機や意欲の特徴を表出させることは、スポーツそのものの普及に貢献されるだろう（清宮ほか，2021）。これまで大学生を対象としたスポーツボランティアの研究は、大学生のニーズを検討した研究（内藤，2007）や実際のスポーツボランティア参加者の思いに着目し、意識変化のプロセスについて調査し、参加学生が消極的態度から活動を通じて積極的に変化していく様相を明らかにした研究が挙げられる（豊田・金森，2005）。これらの研究から、山下・行實（2015）により、Jリーグの運営ボランティアに参加する学生を対象にボランティア体制の整検討をしている。

松本（1999）は障害者スポーツイベントにおけるボランティア活動に参加した学生を対象に参加動機について8因子を抽出している。この結果を踏まえ、清宮ほか（2021）は、スポーツボランティア活動に対して意欲的な学生と意欲的ではない学生の特徴を整理している。体育系大学生はスポーツボランティアについてどのような志向性や活動期待を持ち、それらを類型化することで、その属性について検討している。意欲的ではない学生の特徴として「義務型」と「貢献型」のイメージを有する学生であったと指摘している。これらから、ボランティア経験やスポーツボランティアに対するイメージが活動意欲や参加動機に影響を及ぼす可能性がある。そこで本研究では、スポーツボランティア活動の経験者を対象とし、スポーツボランティアに対するイメージと参加意欲の関係性について明らかにすることを目的とする。

## II. 方法

### 2-1. 調査対象

本調査の対象者は2021年度A大学でのボランティア関連科目履修者63名である。当該科目において、Jリーグでの運営ボランティアと地域スポーツクラブでのボランティアの体験をしている。調査期間は、2021年7月の1週間かけてGoogleフォームによる質問紙調査を実施した。有効回答数は42名（有効回答率：66.7%）であった。

### 2-2. 調査内容

清宮（2021）が作成したスポーツボランティアへのイメージ23項目から得られた結果から6つの因子「ボランティア精神」「ポジティブな活動」「他律参加」「スポーツ技能の活用」「報酬」「所属先参加」として

設定した。まず各因子得点とスポーツイベントへの参加意欲に差異がみられるのかについて検討した。因子得点群を3群に分類し、スポーツボランティアへの参加意欲とクロス集計を行った。各因子得点群は、平均値から前後2点を中群とし、中群より低い得点群を低群、高い群を高群とした。なお、スポーツボランティアへの参加意欲については、「全く参加したくない」、「あまり参加したくない」を「参加したくない」とし、「やや参加したい」、「非常に参加したい」を「参加したい」と設定し直し、3項目で分析を行った。本稿ではノンパラメトリック検定による $\chi^2$ 検定の結果を示したものである。その後、 $\chi^2$ 検定において有意差が認められた項目において多重比較検定を行った。なお本調査の統計有意水準は5%未満とし、データ分析は、IBM SPSS Statistics25を用いた。

## III. 結果と考察

### 3-1. 基本的属性

調査対象者の基本的属性として、性別は「男性」81%、「女性」19%、学年は「2年生」が71.4%、「3年生」21.4%、「4年生」7.1%であった。次に所属は「大学部活動」66.7%、「大学サークル」16.7%、「クラブチーム」2.4%、「所属なし」14.3%となり、過去のスポーツボランティア経験は、「経験なし」50%、「経験あり」50%であった。

表1 基本的属性

		n	%
性別	男性	34	81.0
	女性	8	19.0
	合計	42	100.0
学年	2年生	30	71.4
	3年生	9	21.4
	4年生	3	7.1
	合計	42	100.0
所属	大学部活動	28	66.7
	大学サークル	7	16.7
	クラブチーム	1	2.4
	所属なし	6	14.3
	合計	42	100.0
過去のスポーツ ボランティア	経験なし	21	50.0
	参加経験	21	50.0
	合計	42	100.0

### 3-2. スポーツボランティアイメージ尺度とへの参加意欲の関係について

スポーツボランティアへの参加意欲は、「国際規模」, 「全国規模」, 「地域規模」, 「日常生活規模」は、表2に示すように、各項目とも8割前後が“参加したい”の回答であった。本稿の調査対象者は全体的に参加意欲の高い層が調査対象者であると考えられる(表2)。

次に清宮(2021)が作成したスポーツボランティアへのイメージの得点因子得点(表3)とスポーツイベントボランティアへの参加意欲について、ノンパラメトリック検定による $\chi^2$ 検定を行った。スポーツボランティアへの参加意欲に対する規模として「国際規模」では、本稿での標本数では有意な差がみられなかった( $p<.05$ )。「全国規模」の参加意欲において「ポジティブな活動」因子と有意な参加意欲差がみ

られた。本調査における多重比較検定の結果、「どちらともいえない」と比べ「参加したい」群に有意に高い結果であった。「地域規模」の参加意欲では、「ポジティブな活動」因子に有意な参加意欲差がみられた。地域規模では、すべて参加意欲間に有意な差がみられ、「参加したい」、「どちらともいえない」、「参加したくない」の順に有意に高い結果であった。「日常生活規模」の参加意欲では、「ポジティブな活動」と「スポーツ技能の活用」因子において有意な差がみられた。「ポジティブな活動」では、「どちらともいえない」に比べ「参加したい」が有意に高く、「参加したくない」に比べ「参加したい」が有意に高く、「スポーツ技能の活用」では、「参加したくない」に比べ「参加したい」が有意に高い結果であった(表4)。

スポーツボランティアの活動規模を問わず、参加意欲が高い群ほど、「ポジティブな活動」因子が高いこ

表2 スポーツイベントへの参加意欲

	国際規模		全国規模		地域規模		日常生活規模	
	n	%	n	%	n	%	n	%
参加したくない	1	2.4	1	2.4	1	2.4	2	4.8
どちらともいえない	5	11.9	6	14.3	9	21.4	7	16.7
参加したい	36	85.7	35	83.3	32	76.2	33	78.6
合計	42	100.0	42	100.0	42	100.0	42	100.0

表3 スポーツボランティアへのイメージ

因子名	項目数	M	SD
ボランティア精神	5	23.5	0.345
ポジティブな活動	6	22.4	0.916
他律精神	5	16.2	0.693
スポーツ技能の活用	3	12.8	0.326
報酬	2	5.2	0.349
所属先での参加	2	7.5	0.249

\*M:平均値 SD:標準偏差

表4 スポーツボランティアへのイメージと参加意欲の関係

	G1	G2	G3	$\chi^2$	p	多重比較検定
全国規模						
ポジティブな活動	1	11.67	23.77	11.029	0.004	G3>G2
地域規模						
ポジティブな活動	1	11.56	24.94	11.391	0.003	G3>G2>G1
日常生活規模						
ポジティブな活動	2.5	12.29	24.61	11.029	0.004	G3>G2,G3>G1
スポーツ技能の活用	3	15.79	22.35	7.776	0.02	G3>G1

\*G1:参加したくない, G2:どちらともいえない, G3:参加したい

とから本調査対象者は、スポーツボランティア活動を非日常的な体験として捉えていることが考えられる。Jリーグや地域スポーツクラブでのボランティアを経験していることから、ボランティアそのものの意識変化が生じている可能性が考えられる。本稿における調査実施期間は、スポーツボランティアへ参加後の調査であったことから、全体的にスポーツボランティアへの参加意欲が高くなったことが想定される一方で、ボランティア活動そのものに対する意識変化を促す可能性が考えられる。さらに「日常生活規模」においては、「スポーツ技能の活用」因子に差がみられたことから、地域スポーツクラブでのボランティア経験は、調査対象者にとって、自身のスポーツ経験や技術、知識を活用できる体験であったと認識していることが考えられる。スポーツボランティア活動の推進に向け、自身の経験を活かせる体験がスポーツボランティアへの参加意欲の向上につながることを想定される。

#### IV. まとめ

本稿では、スポーツボランティア活動体験者を対象にスポーツボランティアに対するイメージと参加意欲の関係について検討した。スポーツボランティアに対するイメージから「ポジティブな活動」因子と参加意欲の関係性がみられた。岡鼻(2013)は、「ボランティア活動経験がある学生は、ボランティア活動経験がない学生よりもボランティア活動を肯定的に評価している」と述べているように、本稿においても、スポーツボランティア体験後の調査対象者は、スポーツボランティアに対してポジティブなイメージを抱いていることが理解できた。さらにスポーツ技能の活用と参加意欲に関係がみられたことから、スポーツボランティアとしての体験活動が自身のもつスポーツ経験や技術、知識が活かされることが参加意欲に対してポジティブに働く可能性が示唆された。

しかしながら、本稿では、スポーツボランティア経験者のみが調査対象者であり、経験の有無によるスポーツボランティアへの意識は捉えられていない。ボランティア活動経験がない学生はボランティア活動に対して批判的なイメージが高く、期待感も低いことも指摘されている(水野・加藤, 2007)ように、スポーツボランティアに対する参加意欲に影響を及ぼす諸要因については、さらに詳細な検証が求められるだろう。

#### 引用参考文献一覧

- ①水野邦夫・加藤登志郎(2007) ボランティア活動への参加は個人の心理的成長に寄与するか? - ボランティア活動経験とパーソナリティ特性, 社会的スキル, 充実感, ボランティア活動観の関連性からみた一考察 - . 聖泉論叢 (15) : 141-156
- ②松本耕二(1999) スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究 - 障害者スポーツイベントのボランティアに着目して - . 山口県立大学社会福祉学部紀要5 : 11-19
- ③松尾哲也(1998) スポーツボランティア活動参与の規定要因に関する実証的研究 - スポーツ及び生涯学習に関する認知/行動要因の影響を中心に. 福岡大学体育学研究28 (2) : 33-51
- ④長ヶ原誠・山口奏雄・野川春夫・菊池秀夫(1991) スポーツイベントのマネジメントに関する研究 - ボランティア継続意欲の視点から - . 鹿児島体育学研究紀要6 : 69-75
- ⑤内藤正和(2007) 大学生におけるスポーツ・ボランティア活動へのニーズに関する研究. 愛知学院大学論叢. 心理科学部紀要3 : 21-29
- ⑥岡鼻千尋(2013) ボランティア活動経験が大学生のボランティアイメージに及ぼす影響. 心理科学. 34 (2) : 68-76
- ⑦清宮孝文・依田充代・門屋貴久・阿部征大(2021) 体育系大学生のスポーツボランティアに対するイメージの類型化 - スポーツボランティア活動に「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」の特徴に着目して. 日本体育大学紀要50. 1019-1029
- ⑧スポーツ庁(2017) 第2期スポーツ基本計画について, スポーツ基本計画
- ⑨谷幸子・中比呂志・山下秋二・清田美絵(2003) 障害者スポーツボランティアの類型化に関する研究 - 活動期待の視点から - . 体育・スポーツ経営学研究18 : 1-12
- ⑩豊田則成・金森正雄(2007) スポーツ・ボランティアを経験することの意味とは? びわ湖大学駅伝にボランティア参加した本学学生の「語り」から. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要4 : 9-18
- ⑪山口奏雄(2004) スポーツ・ボランティアへの招待 - 新しいスポーツ文化の可能性 - . 世界思想社
- ⑫山下博武・行實鉄平(2015) 徳島ヴォルティスにおける運営ボランティア参加学生の意識変容プロセス. 体育・スポーツ経営学研究29 : 33-51